

中嶋 滋

元運営審議会委員



なかじま しげる
1969年早稲田大学卒業。同年自治労中央本部書記局に就職。90年－99年中央執行委員（国際局長）。95－99年アジア女性基金運営審議会委員。99年－2005年連合常任中央執行委員（総合国際局長）。2004年ILO理事（労働側）。

の関係はいかにあるべきか、将来に向かってどういう関係性をつくりあげていくかということについて、学ぶ点が多かった。

特に金田（君子＝仮名）、さんが私に与えた影響は常に大きかった。彼女は、たまたま私の母親と同じ年でした。同じ時代に生まれて、生まれた場所が朝鮮半島か日本かの違いで、これだけの差ができてしまうということを考えるとき、当時の日本が彼女たちの人生に与えた負荷――あまりにも大きく深い傷を彼女に負わせている。

その後金田さんが、「私が平凡な一生を送れたとしたら、あんたくらいの子どもがいたんだよね」と言われたときは、何ともいえない気持ちになりましたね。金田さんをはじめあの年代の人が受けた傷を、その息子の世代である僕がどういうふうに対応できるのか、すべきなのかということを非常に強く感じました。それだけでも僕にとっては非常に大きな教訓だったんです。

基金にかかわるまで

――償いの事業、とくに韓国・台湾事業の実施担当としてご苦労されたのですが、いまのお気持ちはいかがですか。

中嶋 結論的には、やはり関わってよかった。僕自身も非常に勉強になった。戦後補償問題から日本の歴史の問題、とりわけ韓国、中国をはじめとしたアジア諸国と日本と

もともと僕が社会的な運動に本格的にかかわりだしたのは一九六四年から六五年。日韓条約締結反対闘争というのが当時の学生運動の一つの大きな課題だった。当時の問題意識は、日米韓の反共軍事同盟強化反対という極めて政治的な視角からのみ考えていた。しかし、日本がかつて朝鮮半島の人々に対してどのような侵略、植民地化というプロセスと実態のなかで傷を負わせ、それに対してどう追跡し歴史的に責任を果たすか。それが当時の日韓条約のなかにはつきりと盛り込まれていないということに対する批判は、当時の学生運動も労働運動も非常に希薄だったんですね。そういう日本側の取り組みが、条約反対闘争から戦後補償をきちつとして新しい関係をつくりあげていく契機を運動的には失わせしめた。位置づけの貧しさがそうさせたという意味で、被害者に対して十全な補償がなされていないという責任の一端を、運動に関わった側としてもつべきであるという考えがありました。

――当時ようやく戦後補償に目が向いて、慰安婦問題も課題になっていきました。

中嶋 それを痛感したのが村山政権の樹立で、戦後五〇年を契機にして、いままでなし得なかったことをという社会的な機運も高まった。その思いをもう一度もつて、戦後補償が法的賠償としてきちんとなされるべきであると

いう立場に立っていました。だから村山政権がこの基金構想をつくっていく初めの段階では、むしろ批判的、反対であるという立場。曖昧にしてはならない、被害を受けた方々に対してきちつと賠償、補償をすべきであると思っていました。では、具体的、現実的に償いの気持ちを表すためにどうしたらいいのか。思い至ったのは、韓国の被害当事者の人たちにお会いしてお話を聞いていくなかででした。いずれも過酷な半生を送られて、精神的にも肉体的にも非常にダメージを受けている、しかもどんどん高齢になっていく。理想的に賠償として実現していくということを追求しつつも、命の時間との競争という側面をもっている課題ですから、それに応える現実性、また具体性をもった対応が必要であろうと考えました。最終的に批判的関与という道を選んだというのが、基金に対する当時の基本姿勢でした。

基金のなりたちと事業

――政権与党は「自社さ」連立でしたが、当時の総理府や外務省も内閣の意思を受け止めて進めましたね。

中嶋 全体としてそれぞれ、善意とか真摯な気持ちはもっておられた。政府の官僚としては、いわば戦後五〇年を契機にして、のどに刺さっている骨を抜いておかまいとこの後の国家としてのありように齟齬をきたす可能性、

危険性があるから、なんとしてもそういう骨を抜く努力はしないといけないということであつたと思いますね。サンフランシスコ条約とそれを処理した二国間の条約で全部法的にきりがついている。この立場は絶対曲げられないということ、不動のものとして彼らにはあるわけですね。けれども人道的な立場から、特別な切り口で議論が成り立つ課題の設定ができる分野については、特別な措置というのを自民党を中心とした政党を説得してするように努力しなきゃいけない。官僚として、将来に向かつて大きな障害になつてしまうかもしれないトゲを抜くようになんとかここでやろうとした。

基本は法的には終わっているが、被爆という特別な切り口で人道的立場からの特別な追加的な措置ができる。二番目、家族離散という特別な切り口。これはサハリン問題等がそうです。

もう一つが性という切り口で、この慰安婦問題。同じ強制的手段で連れていかれたという意味では同じで、切り口が違ふというわけです。僕らは、特別の切り口で追加的措置という形態をとつてもやることを通じて、どのように全体的な補償、賠償にもっていくかを考えていて、同床異夢のところがあつた。

——戦後五〇年、戦後補償への取り組みでも議論はさまざまありました。

女たちにお会いする機会を得た人間だからそう思うのかもしいないけれども、やはり原則論だけで何事もできなかったのと比較をすれば、大きな意味があつたのではないかと思つていますけどね。

——労働運動と市民運動の接点でいうと、自治労鳥取県本部などの動きがありました。

中嶋 一九六五年の日韓条約締結反対闘争に、労働運動として取り組んだことが経験としてあるわけです。当時の鳥取の委員長は、まさに僕と同年の人でね、彼はそのとき労働運動の現場にいて、同じような思いをもたれていた。

彼は実践的であつて、若い世代の組合員に戦争被害当事者との対面、交流を通じて戦争の悲惨さなり、自分たちが加害の側に立たされているということと、被害の側に立たされた人と本当に人間同士向き合つて、未来はそこからしか開かれなないと考えた。「慰安婦」とされた人々を鳥取に招待して、若い組合員の家にホームステイをさせていただいて、夜通しさまざまな経験を語り継いでもらうというプランを実施した。若い組合の人が自然に被害当事者の肩を揉んだり、足をさすったりする。その中で本音をとつと日本語で伝え、語る。そういう交流を通して、こんな人のいいおばあさんに過酷な目に遭わしたのが自分たちのおじいさんの世代であることをその若

中嶋 半世紀ですからね、過去を振り返つて将来に向かう一つの節目で、いまやつておかないと禍根を残すという心情をもつ時期だったのかもしれませんが、日本の場合はその時に「自社さ」という戦後なかった枠組みができたという政治的なタイミングがあつた。「基金」反対派の人たちは、一緒にやつていればもつと賠償に近いものを実現できたかもしれないという。けれども、逆に圧倒的な保守政治勢力があつて、社会的な動向としても戦後補償問題は遠い過去のこととして一般市民社会では受け止められて、牢固とした考え方が根を張っている部分もまたある。そういう政治社会状況のなかで何ができるか。被害当事者の命の時間との競争という局面のなかで、短時間にきちつと成果を固めて届けることを考えたときに、逆に原則論ばかり言つて外から反対、反対ということに全精力を集中して対応して、いつたい何が生まれたのか。一緒にやつて、中から「基金」の事業をもつと豊かなものに、あるいは当事者の気持ちや状況に添つたものができたのではないかというのも議論としてはあると思う。

結果を見てもみると、現在ちょうど「基金」が発足して一〇年、事業を受け止められた方も、また受け止められなかった方も被害当事者の多くが次々と亡くなられている。僕は彼女たちが存命のあいだにわれわれの償いの気持ちを届けられたということの意味は、これは直接彼

い組合員が感じ取っていく。自分がどう向き合うかということで、そのあと友達や組合の仲間を誘つて韓国に旅行に行つて、おばあさんのところを訪ねて泊めてもらつて……と発展していった。そういう取り組みが鳥取県本部だけではなく、いくつかのところであつて、そういうことを基盤にして「基金」の国民の償いの気持ちを表す拠金活動についても関わっていく。実際に被害当事者に会つて、そういうことをやったところは、いまできること、自分たちの気持ちをどういうかたちで具体的、実質的に届けるかという観点から、「基金」に対し一定の批判をもちながらも積極的にその募金活動をやっていったわけですよ。労働運動でも、若い人たちが日本の戦後補償問題に取り組んでいる市民運動の方々とか、韓国の市民運動の方々や韓国遺族会も含めて交流するなかで、運動の幅というか、とりわけ人権問題の重要性——これ女性の権利の問題も当然含まれますが——に関心領域が広がり、当然運動課題としての幅も深みも増すということになったといえるでしょう。

アフターケアについて

——償いの事業の実施内容、スキームを固める過程で大変な議論を重ねました。そして今、「基金」はアフターケアを課題にしています。

中嶋 実施のスキームをどうつくるか、私は当時の外務省のアジア地域政策課の人々とか、内閣官房の外政審議室の人々とずいぶんやりあって、ほとんど殴り合い寸前ぐらいまでいったことは何回もあって、夜中の二時、三時まで何日ものそうした経験を、いまとなつては懐かしく思い出します。被害当事者の方々はこういう実態に置かれ、こういうふうに通じていますよ、それに応えるようにしないとこの事業全体が必ず失敗しますよという説得の仕方を含めてつづけた。彼らがそれなりに努力をして、当初考えられていたスキームを被害者のおかれている実態や気持ちに近づけることもできたのではないか。この間、金田さんをはじめ僕が非常に多くのことを教えてもらった人が、次々と亡くなっておられて非常に悲しい思いをするんですが、「忘れることは決してできない、しかし少しは許す気になれたよ」ということ、その許す気になれる度合いを少しでも深めていく最後の努力を「基金」はすべきだと思いますね。その最後の努力というのは、フオーアアップとアフターケアとか言われている課題で、僕は基金の事業の成果が最終的に問われるのはいまだと思うんですね。まさに彼女たちがつらい人生の最終局面に立ち至っていて、明日はわが身かと思わざるを得ない状況のなかで日々暮らしておられるのが現状でしょう。そういう彼女たちに、許す気を少しでも多くもつていた

だくというのは、われわれにとっても非常に重要なことであろうと思うんですね。

だから、店閉めの清算事業的な観点からは、このフオーアアップ、アフターケアをやつてはならない。やはり、基金の事業を最後に完成させる意味のある事業として考える。画龍点睛を欠くと言いますけど、この課題については、そういう基本的な位置づけというのを大事にした取り組みをすべきではないかと思っています。

僕は原前理事長には本当に感謝をしたいと思っています。僕は学生運動をやつて、警視総監原文兵衛の名前によく逮捕、勾留されました。まさか「基金」で一一緒に仕事をさせていただくとは思ってもみなかった。原さんが、現場つまり被害当事者とその実態と向き合つて、その方たちの気持ちを踏まえての意見は最も重視をするし、それを尊重しますよという態度に徹してくれた。僕らにも、そういうことで仕事をどうぞ進めてくださいと言つてくださったから、ずいぶん力づけられて、ありがたかったですね。原理事長は、僕が学生のときにもつていたイメージとはまったく違つていた。やはりあの見識と温かいお人柄、僕は尊敬しています。非常に多くのことを教えてもらった感じですよ。あの方は、だから金田さんや被害者の人に会つても、話の聞き方とか接し方とか、率直に言つて頭の下がる対応をされました。差別感つていうの

は一切感じさせない。被害を受けた方の大多数は当時の朝鮮半島のなかで最も貧しい、下層に位置づけられた人々の子どもだったわけですね。字が読めない、書けない人も多い。だけど悲惨な人生から学び取った人間としての立派さがある。そういう人たちに原さんは、本当に人間としてちゃんと向き合つていたということです。口では高邁なことを言うけれども、態度を見ていると明らかに差別的に扱つていたり、見下したりという人もありますからね。原さんはそういうことは絶対なかった。僕は、原さんと一緒に一時期仕事ができたことは非常によかったなと思っています。

——慰安婦問題で、結局は、被害者にどう向き合うかが問われました。

中嶋 日本の運動団体も政治家も、たぶん自分たちの運動的なアリバイに使つたり、政治的な立場表明の道具に使つたりしてきたのではないか。そう感じ取れるような悲しい対応をした人々、団体というのはあると思う。「基金」を受けた被害者を「売国奴」呼ばわりするなど、許されないことだと思います。それは内外を問わず感じていることですね。運動の論理とか、ある種学問的とかの論議で正義か否かみたいな切り口だけで論ずることができる課題であつたら、それはそういう次元でおやりになるのはいい。しかし被害当事者がいて、その人たちの生

活の実態と切り離せない気持ちがあつて、しかもその人たちが目の前にいつ自分の一生を終えるかわからない時間的な切羽詰つた状況がある。そこでどうするのかを考えると、簡単にイエスカノーの思考様式でものが律せられることはないと思うんです。僕は自分なりに被害者のおかれている実態と、そのお一人一人の気持ちをやっぱり受け止めた対応はしていきたいと思っていますね。

慰安婦とされた方々の家（アパート）に行ったときに、風呂もなく洗面所とトイレのところにシャワーの蛇口だけがついて、プラスチックの桶で水みたいにお風呂に入っているわけですね。寒いときなんか大変だろうなというのを見て、「金田さん、何年生まれ。いくつ」と聞くとう母と同年だった。ショックを受けてね。ふつと、自分が慰安婦にさせられないでそれがうまくすり抜けられたとしたら、同じぐらいの息子がいても不思議がなかったんだといわれた。それをどういう思いで言つたかね、それを考えるとやつぱりつらいですよ。どこかに金田さんに対する思い、ああいう人を生み出した日本のあり方に、やつぱり最後までこだわり続けなさいといけないという氣にずっとさせられていますね。

——終わったなんて、とても思えない。

中嶋 思えない。金田さんのああいう言葉をじかに聞かなかったら氣がつかなかったもしれない。亡くなる前の年

だったか、日本に最後に来たときに、周りから「ほら、金田さん、恋人の中嶋さんが来たよ。一緒に並んで写真を撮りなさい」と言われて、「髪の毛ボサボサで化粧してないから、だから一緒に撮れない」と言って……。その

写真では彼女は顔を隠して写っている。そういう可愛いところがあつたですね。
(アジア女性基金ニュース二七号より転載、見出しを改めた)